



金 沢 大 学 長

山崎光悦

金沢大学は、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の位置付けをもって改革に取り組むことを大学憲章に掲げています。2016年度から始まった国立大学の第3期中期目標・中期計画期間中の機能強化のための3つの類型では、金沢大学は第3類型を選択しました。つまり、世界と伍して卓越した教育研究を展開する大学、いわゆる「世界卓越型大学」を目指す方針を固めました。現在、その方針に沿って、全学を挙げて改革を推進しています。

教育においては、学生が卒業までに身に付けるべき能力として「金沢大学〈グローバル〉スタンダード」(KUGS)を策定し、専門知識と課題探求能力、さらには国際感覚と倫理観を有する人間性豊かな人材の育成を進めています。2016年4月に創設した国際基幹教育院では、KUGSに基づく約30のグローバルスタンダード(GS)科目を用意しました。21世紀を生きる社会人として環境問題についての必要な知識を身に付けるための科目である「環境学とESD」もその一つです。環境問題に関する見識を備えた人材を育成するため、環境教育を積極的に推進しています。

研究においては、国内外の研究機関と連携しつつ、環境に関する研究のより一層の強化・充実を図っています。2017年7月には、国立研究開発法人産業技術総合研究所と「エネルギー・環境分野に関する包括的連携協定」を締結しました。協定締結によって、研究者間の研究交流等をより一層密接に行い、相互のグリーン・イノベーションの推進による“超”省エネ・低炭素社会の実現を目指しています。

一方で多くの自治体と連携したESD活動も積極的に推進しています。「能登里山里海マイスター育成プログラム」や文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」等を通じ、持続可能な社会の礎となる先駆的人材の養成に取り組んでいます。2014年9月に本学が代表団体として設立した「北陸ESD推進コンソーシアム」では、学校や企業等様々な団体や関係者が、北陸地域全体でESD推進と持続可能な社会づくりのために積極的に活動しています。

金沢大学では、教育研究活動に伴う環境への影響を最小限に抑えるよう、環境負荷の低減を目指し、全学的に環境マネジメントシステムを実施しています。環境負荷の少ないエコキャンパスを目指し、資源・エネルギー使用量の削減、温室効果ガスの排出量の削減、自然環境の保安全管理に継続的に取り組んでいます。角間キャンパスの約1/3を占める里山ゾーンでは、地域住民・NPO・企業・行政と連携して、樹木や竹林の管理・保全を実施しています。

金沢大学は、環境配慮が今後の持続可能な社会づくりに不可欠であると認識し、引き続き、環境分野での教育、研究及び社会貢献の一層の充実を図るとともに、大学活動による環境負荷のさらなる低減を目指します。